

# ドイツ労使関係分析における イデオロギー的労使関係の把握について (1)

## ー認識背景としての批判理論の基本問題ー

朝 日 吉太郎

### <構成>

#### はじめに

#### I 「批判理論」とフランクフルト学派の社会認識

##### 1 Th. アドルノの社会認識と非合理主義

##### 2 J. ハーバーマスの社会認識と問題点

##### 1) 非合理主義から合理主義的理性批判への旋回

##### 2) ハーバーマスの社会理論の特徴と問題点

#### 以下次号

#### II フランクフルト学派労働問題研究者集団の労使関係論への影響

##### 1 介入主義国家と階級闘争の「制度化 (Institutionalisierung)」

##### 2 二元的労働者利益代表制度と集権的労働組合への権能委譲システム

##### 3 「協調のとれた行動」とコーポラティヴな労働組合

#### III W. シュトレークの労働組合論

##### 1 「リベラル・コーポラティヴな」労働組合

##### 2 労働組合の組織問題への対応

##### 3 シュトレークのハーバーマスの展望の意義と限界

#### おわりに

#### キーワード

ドイツ, 労使関係, フランクフルト学派, イデオロギー, 方法

## はじめに

本論文の課題は、ドイツ労使関係論の方法論的検討をおこない、現代労使関係分析のための方法的課題を示すことである。検討の対象となるのはドイツ労使関係分析に大きな影響を与えてきたフランクフルト学派のいわゆる「批判理論」の立場にたつ労働問題研究者集団の見解である（以下、本論文では彼らをフランクフルト学派労働問題研究者集団と呼称することにしたい）。

さて、フランクフルト学派労働問題研究者集団の分析方法について検討をくわえる前に、労使関係分析の方法一般についての基本問題を検討しておきたい。なぜなら、いかなる方法的立場にたつのかという問題は、精神世界の問題であるだけではなく経験科学をおこなううえでも決定的な問題であるからである。例えば我々は定点測量をおこなう場合にピタゴラスの定理を与件として利用している。ところが、それと同じ程度にまでに対象世界の認識のための一般的な科学的方法を与件として利用するということがいまだ確立されていないため、現実の認識の方法は実践的に多様なものとなっており、その結果、様々な現実解釈が生まれ、それとともに現実の改造にたいする実践上の様々な混乱が生まれている。

これらの多様な混乱の中で、とくに本論文で問題とするのは、現実の社会関係とりわけ労使関係を分析する際に発生する諸混乱である。その中でも大きな影響をもっているのは、資本・賃労働関係を措定的反省関係としてのみとらえる諸見解である<sup>1)</sup>。この見解を検討し克服することは、現代資本主義の下での労使関係、とくに、労働運動における固有の形態規定の分析する際に大きな意義をもっている。

これらの見解を一般的に「統合論」と呼んでおこう。「統合論」の特徴は、資本・賃労働関係の持つ相互前提的側面に目をうばわれて、資本・賃労働関係を資本によって労働者の自立性が奪われる有機的な統一性の側面のみをとらえる点である。すなわち、資本・賃労働関係が他の側面では相互排除関係の側面をもち、それゆえ相互に対立する2つの本性が闘争する矛盾的有機体であることや、その結果として、労使関係は絶えざる変態を遂げつつ発展するものとなり、あるいはまた、有機体自身の消滅を導かざるをえないものとなるということをとらえない、

というのがその特徴である。

、 労使関係に有機的統一の側面をみることに誤りなのではない。現実の労使関係は、まぎれもなくそのような有機的統一性をもっている。この統一性は、さらに資本と賃労働の間の相互前提性を主要な側面として前面に展開させるような諸要因、国家の介入、労働運動の上層部の買収、労働運動の社会排外主義的傾向など現代資本主義におけるイデオロギー的社会関係による形態規定の下でいっそう補強されている。それゆえ労働運動は今日の資本主義の下で、固有の困難性をもっているのである。

従来我が国においては、このような労使関係の安定性を分析しようとする試みに対して、これを現実を反映しない敗北主義的立場のあらわれであるとする見解

---

1) ヘーゲル論理学において、反省 Reflektion は本質論を貫く精神活動の主たる特徴である。G. W. F. ヘーゲル Georg W. F. Hegel は反省を、措定的反省、外的反省、規定的反省として説明している。現象（仮象）から本質へ、そしてまた現象へという論理の歩みのなかで、事物はまずその直接的な自立性を奪われ、単なる仮象（被措定有）となり、措定的反省としてとらえられる。ここでは、本質も仮象に規定された被措定的なものである。それゆえ仮象から本質の認識の歩みは、「無（自立性のないもの）から無への運動」としてとらえられる。しかし、このようにとらえられた本質は様々な形態をとってあらわれる現象を規定する実体としての核心であるから、本質と現象（仮象）の関係は、本質が自らの前提者である現象（仮象）を自己の否定者として規定し、自己自身を反省する関係である。他方では、本質の前提となった仮象は本質に規定されているが、この被規定性はそれ自身の直接性にとっては無関係であり、それゆえ自らはただ被措定有として外面的に規定されているにすぎない。このように、本質による一方的な規定性とその前提である直接的なものの外面的な規定性とが分裂し相互に対立しあうのが外的反省関係である。ヘーゲルは、このような一方的前提関係を悟性的認識（分析的な科学にとっては一般的方法であるのだが）として退けて、最後に本質と現象のそれぞれが、他者のモメントとなって両方の自立性を奪いあう関係（措定的反省）でありつつ、同時に、本質が自律的に現象を規定し、一方的に他方を規定する関係（外的反省）として、統一的にとらえる見地を示す。それは、矛盾が自己を調和的に解決する姿として現実の諸関係を描くことになる（ヘーゲル〔24〕中巻, pp.17-31）。

なお、見田石介は、ヘーゲルの規定的反省は従来相互自立性の喪失関係として理解されてきたが、これは正しくなく、調和とすることがあるとしても、現実にあるものは相対的に自立している側面をもち、それだけで自立しているという、世界の真相を示したものであるとし、非自律的なものの自立をみとめない措定的反省の立場からは道理に反することのみが実践的態度となるという制限性を示している（見田〔27〕 p.71 ; pp.95-96）。

があった。この見解に対しては二重の評価が必要である。まず、この主張が、現実の社会関係は共時的にも通時的にも多様であるから、資本による労働者の統合性の完成という側面で労使関係の全てを理解するのは多様な現実を直視しない議論であるという内容を、その経験的認識にたった正当なものである点进行评估することが必要である<sup>2)</sup>。これが第一の評価点である。しかし、この点ももっと分析的に考えれば、この主張の正当性の背景となっている労使間の対立の経験は、実は、労使関係の実体としての経済関係における相互対立的側面があらわれたものである。したがって、「統合論」が主張してきた労使の相互前提性と一対となったもう一つの本性が現象したものであることがわかる。つまり、現実の労使関係において、労使の社会関係は経済的過程に究極に規定されるがゆえに、労働者は資本のもとに統合され、同時に統合されないという関係が真の関係であり、それゆえ労働者は統合された存在として経験され、また労働者は統合されない存在として経験されるのである。このような抽象的な基礎の上に現代資本主義におけるイデオロギー的上部構造の形態規定を加えたものが今日の労使関係の具体的普遍である。このことを認識して、統合性のみを一面的に強調する「統合論」を批判すべきであった。しかし、この点への考察は十分ではなかった。

---

2) 戸木田嘉久は、労働者階級の「統合化」の重視という点では徳永重良の見解に同意を示しながらも、徳永が、資本と国家によって労使間の対立が危機に発展しないように様々な予防措置が講じられていると、その諸契機を示した後で、「貧困化法則の全面的妥当性を相変わらず主張する立場は、オプティミスティックすぎるのではなかろうか」（徳永〔14〕p.105）と主張していることに対して、従来の見解には「貧困化」と労働運動の関係の理解に問題があったことを指摘しながら、以下のように徳永を批判する。戸木田は第一に、徳永の批判の対象となったオプティミスティックな立場が主張する「『貧困化論と変革主体形成論を統一した理論』など、双方次元の異なる問題であり、ありえないとかがえている」（戸木田〔13〕p.92）として、貧困化が労働運動を発展させるという理解は、マルクス主義貧困化論の主張ではないとする。戸木田によれば、それゆえ徳永の批判はその点だけに限れば必ずしも的はずれではないことになる。しかし、第二に、現実の労働者の闘争が完全に国家と資本の下に統合されるもののようにとらえる徳永の主張は、「国家独占資本主義下の蓄積過程が生み出す基本的矛盾の展開に関して、積極的な関心をよせているようにみえない」、現実の全体をみない理論であるとして批判し、「労働者階級の労働と生活をとらえる貧困化の具体的形態の把握の重要性」の意義は失われないことを主張している（戸木田〔13〕p.111）。

労働者の闘争の困難性を否定する見解の根底には、現実の事物の底流として存在している事物の流転の側面だけを一面的に強調してとらえようとする見解が存在しており、事物の発展が流転と変態との二重の内容（制限と限界の弁証法）をもつことの意味を省みる点では弱点をもっていた。たとえば、現実の闘争の困難性を示すことは労働者の闘争志気をさげるからだめだというようなロマン主義的見解も存在した。このような見解を「危機論」的見解と呼んでおこう。これが、第二の評価点である。

これに対して、現実に関対的安定性をもって変態を続けながら発展している資本・賃労働関係を、有機的統一の側面からとらえようとする「統合論」の立場からの見解は、「危機論」的見解をマルクス主義の一般的特徴だと誤解したうえ、マルクス主義は社会関係の総体を経済的諸関係にのみ還元する一面的理解であるとして批判してきた。しかし、みてきたように、「危機論」の最大の欠陥は、経済的規定性がイデオロギー的上部構造の自立性を全く奪うかのように主張しているようにみえる点ではなくて、彼らが経済的規定性のもつ二側面を正しくとらえないゆえに陥っている一面性なのである。それゆえ、「危機論」的立場の論者を「経済還元主義」とか「本質還元主義」とか呼ぶことは、むしろ彼らの欠陥を見逃すことであり、皮肉にも、批判者の意図に反して、彼らをマルクス主義の正当な理解者としての立場にあるものとして美化することであったのである。

「統合論」は、このような「危機論」的見解にたいする批判的立場に基づいて現実の労働者の社会的統合をもたらしている諸関係を説明を試みてきたのであるが、そこには以上のような不徹底な批判の背景となるような別の欠陥があらわれている。

一般に対象世界を有機的統一性の側面のみで説明することは、現実の均衡と安定の側面を一面的に強調することであり、現実の諸関係を肯定的にのみとらえることである。したがってその結果、「統合論」者の社会認識にとっては、動かしがたい現実が一方に措定され、他方には変化を望む観察主体である自分自身の問題意識が置かれることで、現実を限りなく肯定する論理と、否定する願望の間には絶対的に解決不能な葛藤が必然的に生み出されることになる。そしてこのこと

が、変革の展望をもつことを困難にするので、無根拠なペシミズムを生み出す原因となり、あるいは、ひるがえって非合理主義や冒険主義の温床となる。その結果、実践的に否定的な影響をも及ぼす。

我国における労働問題研究をふりかえっても、同様な見解は多々存在している。例えば、高度経済成長期における、労働者の賃金の企業間格差が減少していったことや、ビジネス・ユニオニズムにたつ労働組合運動が展開した状況の下で、労働者が「中産階級」というイデオロギーに統合された存在となってしまうことを必然的なものとみる労働者像や、日本独自の労使関係の制度的枠組みの中での労働者の行動様式がビジネス・ユニオニズムを形成する前提となっている事態を労使関係の事柄の全てとみる見解がある<sup>3)</sup>。これらの見解は、労働組合運動における階級的ヘゲモニーの確立の困難さを一面的に描き出しがちである。このような見方からは、労働者の社会階級的意識の原点への憧憬や、そのような主観的な理念を規範とする労働者の互助的共同体や労働者世界を頭の中で考え出して、現実の労働者の社会関係の中に再構築することを試みたり、変革主体は労働運動には存在しないとして種々の市民運動や学生運動にこそ変革の契機となる今日的諸矛盾が存在しているようにいう議論が発生する。悲観主義とロマン主義あるいは冒険主義は、このようなものの見方の土壌のうえに開花する。

本論文は、このような労働問題研究の分野での非合理主義的認識について、ドイツにおけるフランクフルト学派労働問題研究者の労使関係論をとりあげ検討することを課題とする<sup>4)</sup>。

---

3) 筆者は、ビジネス・ユニオニズムによって、労働者が統合され尽くされる存在となることを必然的であるとみる見解に組みしなが、独占的大資本が成立する下での労働力調達様式は、基本的に労働市場を企業別に分断する傾向をもつと考えている（朝日〔4〕p.23-25）。もちろん労働力人口の構造や労働組合の存在と、その種々の形態、国家の規制などによる労働力供給構造に規定され、結果として、労働市場がある構造で均衡せざるを得ないのは当然だが、労働市場の（とくに、基幹労働者の労働市場の）分断化は技術上、労務管理上、独占資本の競争力の源であるかぎりにおいて、資本の要求でありつづける。欧米における労使関係の「日本化」の議論は、ソ連・東欧の体制が崩壊したという「順風」のなかで、個別資本のレベルで日本的経営の持つパフォーマンスを獲得するために、従来の集権的労使慣行の規制を緩和させ労働市場の分断化を推進しようとする資本要求の表れである。

フランクフルト学派労働問題研究者集団の諸業績はすでに、徳永重良や野村正實らによって紹介されている（徳永〔15〕；〔17〕，野村〔18〕）。また，彼らと我国の研究者の交流もおこなわれており，その成果も示されている（Bergmann, Tokunaga〔2〕，Tokunaga, Bergmann〔3〕）。しかし，フランクフルト学派労働問題研究者たちの独自の分析方法それ自体についての検討は未だ十分になされているとはいいがたい<sup>5)</sup>。

私は，フランクフルト学派労働問題研究者集団が労働者利益代表制度を媒介とした労働者のイデオロギー統合のメカニズムに関する見解を提起したことの合理的側面——有機的統一の側面——を批判的に検討することが，ドイツならびに発達した資本主義諸国の労使関係にみられる労使関係の相対的安定性の解明の手がかりとなり，また，安定性の限界を認識するうえで決定的な意義があると考えている。我国の労働問題研究においては，経済過程から相対的に自立して展開するイデオロギー的上部構造の経済過程に対する能動的作用の評価が十分なされず，とくに，上部構造の作用によって労働者統合が強化されるという側面に対しては

---

4) 徳永重良によれば，(旧西)ドイツ連邦共和国における労働問題研究は，1970年代に入って本格化したとされている（徳永〔16〕 p.35）。その中で，独自の分析方法によって我国のドイツ労使関係研究に多大なインパクトを与えている研究者集団が存在した。それは ISF（フランクフルト社会研究所 Institut für Sozial Forschungen im Frankfurt am Main）に集った労働問題研究者の集団である。本論文では，彼らをフランクフルト学派労働問題研究者集団と総称している。

5) 野村正實はフランクフルト学派研究者集団を「新フランクフルト学派」と呼び，フランクフルト学派の社会認識の理論であるいわゆる「批判理論」では，現実の労使関係分析には実践的に役立たなかったもので，彼らは，A. ザーン-レーテル Alfred Sohn-Rethel の理論からスタートしたとしている（野村〔18〕）。徳永によれば，ザーン-レーテルの理論は，マルクスの『経済学批判要綱』の時間概念に注目したものであり，その理論をフランクフルト学派労働問題研究者集団が吸収したととらえている。例えば G. ブラント Gerhard Brandt の実質的包摂概念は，その用語はマルクスのそれとは明らかに異なるのだが，徳永はこのような試みを「帝国主義段階における組織的独占体の新しい労働力統括方式をとらえるうえの1つの有力な分析ツールを提供するもの」として高く評価している（徳永〔17〕 p.68）。彼らがおこなっている分析をみると，ザーン-レーテルの見解を援用してはいるとしても，むしろ筆者には，彼らの見解にいたるところで貫かれている方法は「批判理論」のものであると私は判断する。

否定的な見解が根強く存在してきただけに、意義深いと思われる。

現代資本主義においてイデオロギー的社会関係を含む労使関係をトータルに把握するための作業は、労働者のイデオロギー的統合によって労使間の闘争が緩和される側面と、もう1つの潜在的な（時には顕在化する）労使間の対立の側面とを分析し、依存関係と軋轢関係との相互に対立する2つのモメントからなる労使関係の総体を把握することが必要である。その1モメントとしてイデオロギー的社會関係における諸闘争の緩和の意味がとらえかえされる作業のなかで初めて今日の労働運動の固有の困難性は科学的内容をもってとらえかえされ、その限界をも示されることになる。ただし本論文では、そのようなトータルな労使関係認識のための指標を提示するのにとどまらざるをえない。

本論文の構成に示したように、本論文の具体的作業は以下の内容である。第一に、フランクフルト学派の基本的見地からみた社会認識を検討することであり、第二に、フランクフルト学派労働問題研究者集団におけるその理論的影響を示すことであり、第三に、そのなかで特にシュトレークの理論を検討することでフランクフルト学派労働問題研究者集団における労使関係理論の展開にあらわれた具体的な問題点を検討することである。

## I 「批判理論」とフランクフルト学派の社会認識

この章では、フランクフルト学派労働問題研究者集団の分析方法を理解する前提として、フランクフルト学派の「批判理論」について概括的な検討を加えたい。

フランクフルト学派は、社会を単に経済的諸関係に規定され尽くすものとして理解する見解を「経済主義」、あるいは「還元主義」として排除し、上部構造、とりわけイデオロギー的社會関係の経済過程からは相対的に自立的な運動を分析対象とすることによって、現代社会の分析にたいして独自のアプローチをおこなってきた。このフランクフルト学派をフランクフルト学派たらしめているのが、いわゆる「批判理論」である。

周知のように「批判理論」は、マルクス主義の影響を前提に S. フロイト Sigmund Freud 理論の社会理論化を目指すという試みから生み出されてきた



ものである。「批判理論」の研究者たちは、ワイマール期におけるドイツ労働運動の包摂化とナチスによるファシズム支配との成立基盤を検討し、ファシズム的イデオロギーが成立する基盤を受動体としての人間の心理状況に求めた。それとともに、このようなイデオロギー的統合に対抗する要素として、人間にアプリアリに存在する生命衝動（リビドー）の抑圧によって生じる精神的葛藤や精神疾患に注目し、それを分析し、かつ、社会理論への援用をはかった。その意図は、人間（精神）のアプリアリな実体（生命活動）と現代資本主義における社会関係、とくにイデオロギー的社会関係との間に、基本的な軋轢があるという原理的把握をおこない、そこで発見される諸法則を利用して社会変革をおこなう実践的理論を検討することであった。

「批判理論」の基本テーゼでは、第一に、現代の社会は「科学物神」<sup>6)</sup>にとられており、人間の理性が、「道具的理性化」することで解体されてしまっており、本来の在り方を失っている社会である。

第二に、理性の「道具化」によって全体性を奪われ、ただプラグマチックに生きる人々は、その「科学」によって精神の自由や人倫的人間関係を押しえつけられているが、抑制されている理性（あるいは本性）は、この抑圧的環境にたいして反抗をおこなうようになる。それは超自我によって生命エネルギーが過剰に押しえつけられることにたいする無言の抵抗が精神病理状態を生み出すとみるフロイト心理学の主張の如くである。したがって、抑制が進んだ現代社会は精神的（心理的）苦悩に喘ぐ集団的ノイローゼに陥った社会であると理解されている。

それゆえ第三に、人間解放の道筋を解明、実践するためには、実証主義そのものの、あるいは実証主義によって規範化される「科学主義」の枠組みを根底から批判することが必要であるということになる。その手段は、彼らが言う「科学」と

---

6) ここでは、彼らが使用している「科学物神」の意味を、経験的認識から発生する実践的イデオロギー、とくに、経験的認識から生じるプラグマチックな行動規範が、普遍的な「科学的」行動規範として社会行動における主体の価値判断の「自然的前提」としての位置を占め、人間の思考を支配していることとしておく。

いう名の個別実証の寄せ木細工ではなく、社会を「総体」として把握することであり、「科学物神」を解体するための理論的批判を加えることを課題として提起している。

しかし、第四に、このような全体性の認識は「科学物神」の支配の下にある国民大衆に即自的に与えられるものではないから、支配の下に取り込まれてはいない新たな変革主体が求められたり、新たな変革方法が求められたりせざるをえない。それは、このような「科学物神」にたいしてネガティブな態度をとることであり、アウトサイダーとして振舞うことである。そして、自己が設定した変革の困難性を理解すればするほど、社会変革にたいする諦観とそれゆえますます無軌道になる社会的逸脱への主張とを主要な色合いとして持たざるをえない。

ここではフランクフルト学派労働問題研究者集団を分析する前提として、彼らに大きな影響を与え、また彼らの社会観の理論的背景となっている前期フランクフルト学派の代表的理論家である Th. W. アドルノ Theodor W. Adorno と、おなじく彼らに理論的影響を及ぼしてきた後期フランクフルト学派の代表として J. ハーバーマス Jurgen Habermas の見解をとりあげ、彼らの理論が与えた影響をみておきたい<sup>7)</sup>。

## 1. Th. W. アドルノの社会認識と非合理主義

アドルノによれば、現代社会は科学・技術によって自然を支配する術を知った社会であるが、この「科学」による実証主義的な判断規範が成立するとともに、

---

7) D. マクレラン Devid MacLellan の言うように、フランクフルト学派の理論家の中で最も明快であり最も体系的な解説者は、H. マルクーゼ Herbert Marcuse であろう（マクレラン [25] p.312）。しかし、速水治郎の言うように、同学派の初期の理論的支柱をなしたアドルノは「フランクフルト学派の中心人物と云っても過言では」（速水 [23] p.140）なく、彼の基本的見地が後のすべての理論家の素地となっている。またハーバーマスによれば、「フランクフルト学派は1930年代後半のニューヨークにしか存在しなかった」ことになっているが、言うまでもなくハーバーマスは、「後期フランクフルト学派（あるいは、アドルノを前提にしながらアドルノを越えようとする理論的立場）」を代表してきた理論家である。なお、このハーバーマスの発言の意味については、三島憲一の論文「理論と実践の間」（三島 [26] p.3）を参照されたい。

人間が「科学主義」という名の集団的ノイローゼに陥っている社会である。

アドルノの説明は以下の様である。すなわち、人間が自然に対する従属性を克服するためには、精神と自然との「同一化」をはかることが必要である。ところが、一度この「同一性」が完成すれば、いいかえると「科学的認識」がおこなわれたなら、今度は精神を触発するのは自然ではなくて、自然と精神の間に形成された「同一性」自身に転化する<sup>8)</sup>。したがってそれはもうトータルな理性自身の働きではなく、いわば「同一性」の枠内で奇形化された理性の働きでしかない。

---

8) アドルノの実証主義批判が最も鮮明に叙述されているのが、アドルノ／ポパー編『社会科学の論理』内における、「序章」および「社会学と経験的研究」である（アドルノ〔5〕；〔6〕）。アドルノは次の様に実証主義を批判する。

「実証主義は、全体的に社会化された社会がこの社会のなかで機能させるために思考に及ぼす強制を内に含んでおり、その強制が精神的態度となっている。実証主義は認識のピューリタニズムである。ピューリタニズムが道徳的領域で実現したものが、実証主義において認識の規範にまで純化されている。…（中略）…もしひとが実証主義をあの人間への還元…（中略）…に従わせようと思うならば、今日はじめて思考禁止のなかに移されたわけでない性的タブーを、実証主義が理論化していると推測すべきであろう。認識の木から〔その実を〕食べるべきではないということが、実証主義においては認識そのものの原理とされる。…（中略）…演繹的な、隙間のない体系、その外に何も残っていない体系という理念は、論理へと蒸発してしまった表現となる。無神経な啓蒙は、退行へと急変する。…（中略）…実証主義的精神がみずから陥っている退行が、その精神と似てないものを抑圧している。…（中略）…実証主義のこうした観相学〔様相〕はまた、その中核的概念である経験多岐なもの、経験の観相学〔様相〕である。諸カテゴリーは—ヘーゲルの用語に従えば—それらがもはや実体的でなくなり、もはや疑いもなく生きたものでなくなるとき、一般に主題となる。…（中略）…実証主義が指定するところの規制された経験は、経験そのものを無効とし、経験する主体を意図的に排除する。」（〔5〕 pp.66-70）

「自然科学上のモデルを社会に対しても無制限に転用して、すまじこんではいられない事情が社会にはある。だがそれは、イデオロギーが主張しているように、またドイツでの新技術に対する反動的反抗がまさに合理化しているように、人間の尊厳…（中略）…が〔そもそも〕人間を自然の一断片と見なす諸方法では、排除されている、という理由によるのではない。人類は、その〔自然〕支配権の要求のため、自分も自然的存在であるという記憶を追い払い、これによって〔社会の〕盲目の自然成長性を永久化してしまうが、その場合の方が、人間がその自然性を忘れぬように警告される場合よりも、〔人間の尊厳を〕犯しているのである。……社会が硬直化し、そのために人間がいよいよ客体にまで貶められ、その状態が『第二の自然』に帰られている限り、まさにこのことを人間に確認させる諸方法は、決して流神ではない。」（〔6〕 p.92）

それゆえ、人間の自然支配＝「同一化」は、もう1つの極に「同一性」による人間の主体の客体化と人間の主体の喪失・解体を導くことになる。とされる。解体された主体はこの解体を通じて「脅迫ノイローゼ」状態に陥る。これが集団的ノイローゼが形成されるメカニズムについてのアドルノの説明である。

アドルノによれば、このような状態に対して理性は衝動としての反抗を試みる。反抗は「同一性」に対するものであるから、「非同一なもの」でなければならない。したがって、「同一性」に統合されきれない主体の自然こそが、「同一化」されたイデオロギー状況に対する唯一の反抗拠点と理解されることになる。それは、

---

以上の主張には、フロイトの認識からの援用が多々あることを簡単にみてとれる。実証主義的認識の制限を批判すべきであるという尤もな主張と同時に、その批判に際して、科学・人類史一般を否定してしまう見解が含まれている。アドルノは人間の認識は特定の制限の中でしかおこなわれないこと、それはあらゆる情報を同時に受けとめることは出来ないという能力的制限を前提にして、対象世界認識できるという可能性をも含んでいることを理解しない。制限は後退ではなく制限こそ前進の契機である。この点での認識の欠陥と目の前にある実証主義的な文明への批判とがフロイトの文明批判論の援用の中で混ぜ合わされる。

アドルノは、「社会的行動様式を理解、とりわけ社会の『接着剤』の理解に対する、フロイト理論の生産性をぬきにしては、この数十年間に社会学の実質的進歩として記録されうるものは、思い浮かべることができないであろう。…（中略）…その〔フロイト理論の提起した一引用者〕仮説とは、圧倒的多数の人間達は支配関係に身を委ねており、みずからを支配関係と同一視し、支配関係によって非合理的態度へと誘われ、彼らの自己保存という最も単純な関心との矛盾が現れてくる、ということである」（〔5〕p.52）という。ここには、フロイト理論の援用の正当性の主張とともに、社会関係の変化をもたらす契機としてフロイト的な契機をも肯定する立場がうかがわれる。しかし、リビドーの意識的制約こそ人間のアプリオリな特性であることを正しくみないで、動物的側面を人間の本性と理解すれば、これらの制約は非人間的行為として理解されることになる。

また、文化的生活をおこなおうとすれば、諸個人はそれに対応した制約を受けざるをえない。これが、社会的生物としての人間の姿であり、自己要求の制約自体が人間の社会的自由を保障する前提である。もちろん、ここには、集団と個人との相互規定性と対立が発生し、個人の反抗という具体的形態も発生しうる。階級的社会関係はそのような対立を深める要因である。しかし、集団にたいする個の対立は、集団社会を破壊する反抗としてのみ形成されるのではない。また、それは集団社会を破壊・変革する意志を個別的に与えるとしても、集団社会を破壊したり、積極的に変革したりできる力を自動的にもつものではない。

物象化された人間関係を克服するのは、社会にとって偶然的に生起する諸個人の動物的衝動ではなく、物象化される社会関係を把握し、その法則性を意識的に利用できる人間たちの集団であろう。

合理性への反抗であり、科学の「支配」に飼い慣らされていない主体（＝自然）の反抗であり、狂気である（Adorno [1] S.275）。

G. ロールモザーのいうようにアドルノにとって世界は牢獄である（ロールモザー [29] p.57）。そして、批判的理性のなしうることは、結局、この牢獄を模写することであり、その模写とは、主体に対する支配が拡大し、完成させられていることを示すことでしかない。それは、結局、集団ノイローゼ社会の存在を合理化し、「狂気の発作」が支配の恐怖にたいして性急な反抗を試みることであり、そして反抗主体が少数であるが故に敗北することを眺めるだけである。

## 2. J. ハーバーマス の社会認識と問題点

### 1) 非合理主義的批判から合理主義的批判への旋回

現代社会のイデオロギー状況を克服するために「思想理念」や人間の本性に関するあれこれのイデオロギーを現実社会に対置しようとする試みが、無力なユートピア思想への転落を招いたという例は豊富に存在する。アドルノと同じくフランクフルト学派にあって、アドルノなどの初期フランクフルト学派の非合理主義的な「道具的理性批判」の在り方を批判し、分析科学を利用して現実の社会関係の中から現実社会の変革を見出し、彼らの立場を克服しようとしたのが後期フランクフルト学派のハーバーマスである。

ハーバーマスによれば、現代は「介入主義的国家」と「技術至上主義」の時代である。ハーバーマスは現代を次のように理解する。

現代では、第一に、経済的土台の上部構造に対する規定性が瓦解し、国家の介入傾向が増大した。第二に、労働力を主要な生産要素（「生産力」）とした時代は過ぎ、今や科学技術が主要な生産要素（「第一次生産力」）になった時代である。

以上の第一、第二の2つの要因が、

- ① 資本主義初期におけるブルジョア・イデオロギー（「等価交換イデオロギー」）による階級支配の正統化事由を消失させ、それに代わるイデオロギーとして、「技術至上主義」・「業績主義イデオロギー」がその役割をになうようになった。

- ② 国家は、旧来の能動的（＝暴力的）な「階級調和主体」から安定化のための予防方策を技術問題として取り扱う「補償計画主義」主体に転化した。
- ③ このような状況のもとで階級闘争が「潜伏化」され<sup>9)</sup>、国民大衆が「脱政治化」される時代、「後期資本主義」を生み出した。

というのが、ハーバーマスの時代感覚である。

ハーバーマスによれば、階級闘争の「潜伏化」は、「技術至上主義イデオロギー」の社会的浸透と、共同生活上の組織とコミュニケーションの規範的秩序の在り方の変化とによって、支えられている。

ハーバーマスは、後者の支柱を、「目的合理性」による「＜人倫性＞イデオロギーの排除」メカニズムとして把握する。「後期資本主義」以前の社会にあった人倫的な「相互性」に支えられた「市民的公共性」は、社会の組織化と組織の肥大化・中央集権化の進行の中で「物象化」され、今ではシステム化された「政治的公共性」に転じてしまう。「後期資本主義」社会に適合的な行動規範がその下で形成され、人々の判断はその枠組みの中に制約されることになる。これが彼のいう「生活世界の内的植民地化」である（ハーバーマス〔22〕 p.67）。ハーバーマスは、人間が「目的合理行動と適応行動というカテゴリーのもとに自己物象化され」（ハーバーマス〔19〕 p.268）、政治的意識を解体され（「脱政治化」され）、包摂される姿をみるのである。そして、ここで形成される実践的イデオロギーが「科学的な」行動規範として虚偽の真理性をもたされるに至っていることを問題視するのである。

ハーバーマスは、これこそ「科学の物象化」だから、「批判理論」は、この物象性を生み出した実証主義を批判し、「目的合理主義」という「科学性」の体裁を持って流布しているイデオロギー状態、そこから生じている集団的ノイローゼ状態の中から、国民大衆を解放しなければならないとするのである。

---

9) 潜伏化 *Ereinerung* は潜在化、内在化あるいは内部化とも訳されているが、ここでの意味は、意識的あるいは無意識的に階級闘争を回避するという行動規範を内容としたイデオロギーに労働者が包摂され、労使間のコンフリクトの発生を自制的に回避するようになることである。

このように、アドルノにあっては、自然状態と人間（理性の主体）の同一化による「科学」の形成一般がそれを生み出した主体を拘束し、形成された「科学」が主体を従属させ、「客体化」し、結局、主体を喪失させてしまうというようにとらえていた文明批判を、ハーバーマスは、社会システムの有機性の発展・高度化の過程で発生する質的転化として具体的な現実的社会関係の中でとらえ返す。それは、経験的科学、分析的科学一般を否定する非合理主義への批判的立場を据えるうえの前提になる。確かに分析こそ真の批判である。

しかし、ハーバーマスの分析的な側面も、一面性をまぬがれていない。

社会の有機的統一性の中に諸個人は解け去ってしまうのではないし、現代社会は高度に発達した社会関係ではあっても個別としての自立性を完全に奪うような一方的な規定関係が社会の一般的姿ではない。これは、社会的意識形態としてのイデオロギーに対する人間の対応についても言えることである。ところがハーバーマスは支配的イデオロギーの形成と社会的浸透およびその定着について、イデオロギー的社会関係の能動的側面を描くのであるが、彼は統合と誘導のメカニズムをみるだけであって、現実の生活を営む人々の精神の中に絶えず形成される認識と既存のイデオロギーの葛藤をみない。その理由を理解するためには、ハーバーマスの社会理論と彼のイデオロギー論の特徴を理解する必要がある。

## 2) ハーバーマスの社会理論の特徴と問題点

### 1. 労働とコミュニケーションの関係

ハーバーマスにとっての人間社会のもっとも抽象的な関係は、労働と相互行為の2本の柱から成り立っている。K. マルクス Karl Marx は、人間社会の抽象的普遍（歴史上のいかなる社会にも共通な実体的基礎）を、人間と自然との間の物質的代謝過程と生産と交易・分配に関わる人間の社会関係との総体としてとらえているから、ハーバーマスの認識も唯物史観と等しいようにみえる。しかし、ハーバーマスの立場は以下に見るように、マルクスの社会構成体論とは異質なものである。

ハーバーマスにとって労働過程は社会的な規定性をもつ生産様式の要素ではな

くて、単に生産する行為であって、単なる人間と自然との間の物質的代謝過程という「技術的問題」にすぎない。また、相互行為とは、人間相互間の関係における実践上の問題であり、労働とは直接無関係な社会関係として生産様式の要素としてはとらえられない（ハーバーマス〔21〕 p.28）。すなわち、ハーバーマスが、相互行為における人倫的社会関係の独自の法則性を語る場合には、彼はこの関係を生産関係の規定性を排除した全く自立的な関係としてとらえているのである。ハーバーマスは、マルクスが労働と相互行為とを明確に区別せず、意志疎通の行動を道具をもちいた行動に還元して、一切を生産の自己運動に解消しているとして、そのことが、「生産力と生産関係との弁証法的連関にたいする独創的な洞察もただちにあやまった機械的な解釈をゆるすことになった」原因であるとみる。そして、労働があらゆる社会関係の規定要因であり、相互行為自体も労働が規定しているとする通俗的なマルクス理解の問題点は、そもそもの原因がマルクスにあると批判している（ハーバーマス〔21〕 pp.40-41）<sup>10)</sup>。

もちろん、労働とコミュニケーションとは相互に関係しながらもそれぞれは別のものである。またコミュニケーションといっても、労働そのものの行為に必要とされ労働に付随する伝達活動そのものと、様々なイデオロギー的社會関係を形

10) 尾関周二は、現代社会の言語的コミュニケーションの歪曲化に重大な意義を認めたハーバーマスを評価し、この点を重視してこなかったことにたいするハーバーマスの批判が、マルクス主義の通念の一部マルクス理解について妥当するかもしれない点を認めつつ、同時に、マルクスにたいするハーバーマスの評価に対しては批判的である。すなわち、尾関によれば、マルクスは『ミル標注』、『ドイツイデオロギー』、『経済学批判要綱』などの著作を通じて、人間の共同性化活動としての言語の役割を重視し、また、人間の共同性を拡張しようとしてその反対物に転化する商品世界（物象化）に注目していたこと、『ゴータ綱領批判』などにみるマルクスの「解放された社会」のイメージはハーバーマスの言う人倫的共同体と類似のものであることなどを指摘して、マルクスが相互行為を軽視したかのように批判するのには同意できないことを示している（尾関〔9〕 p.154-195）。

また、H.-R. カイザー Hans-Rainer Kaiser は、ハーバーマスが『認識と関心』において、マルクスが労働を超歴史的な抽象的実体として抽出したことに対して、マルクスが労働をその「社会的過程から生じる規定から」解き放って、「人類の自己産出行為を労働に縮小」（ハーバーマス〔20〕 pp.52-54）したという批判にたいして、マルクスの労働観を歪めていると指摘している（カイザー〔10〕 p.17）。



成する際の意志疎通の行為とは別のものである。尾関周二は、コミュニケーション活動を「伝達」的側面の「手段的コミュニケーション」と「交わり」の側面の「目的的コミュニケーション」との統一としての「社会的行為」として理解した上で、「これまでのマルクス主義のコミュニケーション観が、トータルな見地であるべきなのに、どちらかといえば、『手段的コミュニケーション』の傾向を帯びすぎてはいなかったか」と言う（尾関〔9〕p.33）。彼は、「言語＝労働起源説」への批判にたいして、「言語＝労働起源説」自体が誤っているのではなく、その理解こそが問題であったとする。尾関は、労働と言語的コミュニケーションをどちらも人間本性にかかわらせながら、前者を「対象化」として人間と自然との間の物質的代謝を司るものとして理解し、後者を「共同化」として人間と人間の精神的代謝を司るものとして基本的に区別する。尾関は、言語の形成において労働が決定的役割をはたしたことをみとめつつも、労働の深化とコミュニケーションの深化の相関の中で言語が発達してきたことをとらえることの重要性を強調する。すなわち労働が言語を作ったと単純にとらえることに反対し、同時に、言語的コミュニケーションと労働とを分断させて考えるハーバーマスを批判している。

尾関の批判のように、ハーバーマスの立場では、労働とコミュニケーションとはまったく別の行為である。その立場にたつと、労働者が賃労働の人格化として常に資本に対して依存的である規定を受けると、それと同時に、労働を介して資本に対して常に対立的にならざるを得ないという規定を受けることが、いずれも資本の本性によって規定されていることがとらえられない。さらに、イデオロギー的コミュニケーションと労働との関係について、支配的イデオロギーの浸透（とくに人間関係論的労務管理など）が労働生産性を高めることや、その反対に、労働者が資本の対抗的側面を自らの意識に反映させてゆくこと、さらに、結合労働力としてのコミュニケーションを通じてフォーマル、インフォーマルな組織的対抗力をもつようになることなどがとらえられなくなる。したがって、労働者が資本制下の局面毎に発生する種々の実践的イデオロギーに絶えず統合されるのと同時に、現実の労働・生活の実践を通してその実践的イデオロギーの制限を体験し、絶えず苦悩している存在であることをとらえる理論をハーバーマスは

もっていない。

それゆえ、彼は社会変革の展望を語ろうとするとき、集团的ノイローゼ状態にあるとされる国民大衆が、はたして自発的に自己を理性的に批判し、解放する能力をもつだろうかという疑念に常につきまといわれることになる。ハーバーマスは、結局、「相互作用＝コミュニケーション」の場として「公開討論」を通じての解放を考察するのみである。

## 2. イデオロギー＝「虚偽意識」という理解の問題

ここに登場するハーバーマスは、アドルノ同様に牢獄の世界を通常の世界として描き出す、フランクフルト学派の理論家としての共通の姿が刻印されている。

第一は、フランクフルト学派のイデオロギー観での同一性である。これを検討するためには、我々がイデオロギーを如何にとらえるかという問題がある。しかし、イデオロギー論を全面的に展開することは、一朝一夕にはいかないので、イデオロギー論の可能性について差し当たり考えていることを述べたい。

### 1) 支配的イデオロギーの受容をどうとらえるか

イデオロギーは社会的意識形態であるが、それが存在し機能するのは個々人の意識の中においてである。したがって、人間の心的構造を把握することは、イデオロギーの機能を客観的にとらえる前提になる。近年の発達心理学と脳科学の発達、言語論の発達は、人間の精神についての理解に大きな前進を与えてきた。私はこれらの学問領域にとっては門外漢であるが、私の拙い理解では、今日、以下の点でイデオロギー論を豊富化する素材が与えられようとしている点が評価されるべきであると考えている。

第一に、脳そのものの分析は、人間の精神活動が脳そのものの物質代謝を基礎としておこなわれていることをいっそう鮮明に示してきた。具体的には、解剖学や分子生理学を通じて脳の構造の分析が進み、また細胞レベル・分子レベルでの代謝作用の分析を通じて、精神活動を支える物的構造が明らかになりつつある。また、人間の一生をつうじての知能と人格の発達についての分析がすすみ、人間の精神活動の物的構造が脳内の有機的なメカニズムとして理解されてきている。

第二に、外界からの情報や脳内に蓄積された記憶からの情報の入手や、意識の形成に際しての脳内の作用が証明されつつある。脳内で諸情報は神経インパルスのパターンとして処理されるが、その際に情報は、客観的なデータとして処理されるわけではなく、また全てのデータが同様に処理されるのではなく、大脳辺縁系をデータが通過する際に、取舍選択がおこなわれ、扁桃体によるドーパミンの生産などによる主観的判断が加えられたメタ情報として処理されることが明らかになってきた。それゆえ特定の観念材料や直接的な情報については、意識的・無意識的な好悪の反応をもちつつ能動的に情報処理する心的構造が存在することがとらえられつつある。このことは、入手される情報に対する人間の能動性や消極性を形成するという点で反映論のレベルにおける新たな議論の地平を形成しつつあるように思えるし、また、超自我的な規範として脳内に蓄積されるデータの作用の基盤が明らかにされようとしていることを意味している。

第三に、脳の記憶は様々な信号の連鎖ととらえられてきているが、複雑な現実を理解する際に、脳がデータを取り込む場合には、このような信号に対応する受信装置を形成する必要がある。情報の伝達と受信とは相互作用であり、同じことの2つの側面であり、相互に規定しあう関係である。具体的には、特定のイデオロギーや実践的規範は受信装置を形成する要素としてあたかも「抗原」のように作用する。断片的なデータの受信装置を形成する基礎単位は皮質層にある約1,000個あまりの垂直に配列された神経細胞の群からなる円柱構造（ミニコラム）である。これらのコラムが組合わさって特定のデータを受けするのに必要な受信のためのデータ処理装置が形成される。各コラムで処理された断片的なデータは、新皮質連合野において総括された情報として認識される。すなわち、ある情報を分解して再び総合して認識するのに必要な一連の神経細胞の連鎖ができたのであり、この一連のデータ処理の回路がそのデータにたいする受信装置となる。さて、一度形成された受信装置は、認識手段として蓄積されるが、この蓄積とは、神経細胞間のシナプスによる結合体として物的に構造的に残されることである。別の機会に同等のデータを受信する際には、この結合体が受信装置として能動的に作用するものと考えられる。そのほうが、新たに受信装置を形成するよりもはるか

に効率的であり、記憶と新たな情報とを混乱させない手段となるからである。

第四に、情報は、例えば、単なる物理的・科学的な花（赤い花、てのひら程度の大きさの花、特定の香りのする花）でなく、美しい花、好きな花、心惹かれる花として主観的な価値を付与され処理される。このような受信装置の在り方は、人間の情報処理活動を規制する観念装置となる。つまり、この観念装置は一種のフィルターとして、様々な観念材料をデータ処理のプロセスに受入れたり排除したりすることでデータ処理に一定の制約をおこなう。このような機能を果たすが、視床下部であることが理解されてきている。このことは人間の諸活動の前提となる情報の入手際に、情報そのものの物的取捨選択（すなわちその情報が既存の受信用諸装置で対応できるか否か）と主観的取捨選択（すなわち情報が、個人の意識的・無意識的諸要求にポジティブかネガティブであるかなど）がおこなわれていることを示している。すると、人間の経験や学習による受信装置の発達程度と、観念装置のを抑制する心的装置の在り方が問題となってくる。

諸個人が支配的イデオロギーに統合される際の価値判断や、特定の主観的判断のフィルターを通してしか物事をとらえざるを得ないこと、しかし、このようなフィルターは外界からの情報を完全に遮断するのではなく脳を通過していく幾多の情報を選択的に認識し判断するにしかすぎないことを理解すると、人間が特定のイデオロギーに統合されながら統合され尽くさない存在であることが明らかになってくる。

すなわち、人間の意識は、経験論的立場からとらえられてきたようなタブラ・ラサ（＝白紙）ではない。これを言い換えると、後天的に注入されるイデオロギーが、諸個人の人格を形成し、規定し尽くし、諸個人の行動を規制する要因ではないということである。この点について、鈴木茂は、人間の認識が生得的な心的機構が存在することで獲得されることを示し、唯物論的合理論の背景となるべき人間の精神構造をとらえた（鈴木〔11〕；〔12〕）。鈴木によれば、人間は進化の過程でこの心的機構を種としての遺伝形質として獲得してきたのである。したがって、外界への能動的な働きかけをおこない、外界からの情報を能動的に受けとめるような心的構造がアプリアリに存在していることが人間の意識の前提である。それ

る。それを物的に示してくれるのが、今日の脳科学の発達である。

イデオロギーと個々の意識との関係は、以上のような、人間が後天的に社会関係に投入され、一定の社会関係をもつ以前に存在している脳の構造に規定される心的構造を前提として（これ自体も人間となる猿から人間への進化の過程の中で社会的に形成されたものであるが）、投入された社会関係に規定される支配的イデオロギーとそれに包摂されつくさない個人的意識の自立性とが個人の内部で葛藤している関係として理解されなければならないのである。

## 2) フランクフルト学派のイデオロギー観

さて、以上のような前提にたって、フランクフルト学派の主張を多少とも合理的に理解しようとするなら、彼らは、このような心的構造の存在をとらえようとし、人間の行動規範形成の制限性をとらえようとしたのだと評価できる。しかし、彼らは以上のような人間の精神活動の一般的在り方をとらえた訳ではなかった。

人間の心的構造は、このような既得観念が人間の行動を左右する側面だけではなく、恒に日常的経験からくる種々の情報や他の観念材料と結びつき、既得観念を相対化し、場合によっては既得観念に与えていた主観的価値を廃棄し、新たな、情報受信装置や観念装置を生み出す側面が存在する。すなわち、フランクフルト学派が考えるように特定の観念材料を完全に排除してしまう状態、すなわち支配的イデオロギーに支配されつくされるような状態は、現実の精神の状態ではない。なぜなら、情報のインパクトの差はあれ、情報は脳を通過せざる得ないからである。非支配的なイデオロギーなどの観念材料はメタ情報として低い価値を与えられる情報として処理されるか、あるいは、既存の観念を判断基準として忌避されるにすぎない。

ところが、フランクフルト学派のイデオロギー観の特徴は、イデオロギーを虚偽意識として、すなわち、全くの虚偽として創作された意識としてとらえる点である。例えばアドルノは、「イデオロギーは、まさに事実ではないから、科学にとって手に負えないはずのものである」という（アドルノ [5] p.100）。すなわち、現代社会における行動規範は虚偽意識であるから、それをいかにして克服するかが問題とされるのであり、新たな理念を対置し、虚偽意識を払拭することが

主張される。ただし、アドルノにおいて科学における前提である分析的方法は経験主義的に理解され、そこで得られる認識は、全体性や有機性をもつものではなく諸知識の寄せ木細工であり、プラグマティックな規範形成をもつものとしての虚偽性のみがとらえられる。そのため、新たな理念は空虚であり、日常性の破壊や非理性こそが反抗者のスローガンになる。

これにたいして、リアリストであるハーバーマスは、社会のシステム分析をとり入れることで、このイデオロギー認識を無根拠な虚偽意識としてではなく、当面の社会関係の中では「合理的」な実践的イデオロギーとしての性格を付与して考察している<sup>11)</sup>。その限りでは、実践的イデオロギーは、現実の事柄を反映したものであるという認識があり、それ故に、現実の諸関係の中から人々が科学的認識をも獲得しうるということを了解する見地に近づいたかにみえる。これこそ彼の積極性である。

しかし、ハーバーマスは、科学的認識に基づく階級的認識がこのような実践的イデオロギーを受容している精神の中に浸透してくることを容認しない。彼は、技術至上主義や「業績イデオロギー」を、従来のイデオロギーと比べて、正統化の基準を非政治的なものに変えた「先行するどのイデオロギーよりもくイデオロギー性が少ない」イデオロギーとしてしか認識していない（ハーバーマス〔21〕 p.85-87）。つまり、今日のイデオロギー状況はイデオロギー性が希薄となった実践的規範の世界によって支えられているのであり、そのことによって「脱政

---

11) 上野俊樹は、F. エンゲルス Friedrich Engels が『フォイエルバッハ論』において、イデオロギーを「mißverständlich」であるといっていることについて、これを「不明瞭な」という意味として正しく理解せず、「虚偽の」と誤訳して受け取ったためにイデオロギーについての誤った理解が生じたことを指摘している（上野〔7〕 pp.111-112）。さらに加えて、上野はイデオロギーを分析することでイデオロギーが単なる虚偽意識ではないとして、①イデオロギーとは社会的意識であること、②イデオロギーはイデオロギー的社会関係であること、③イデオロギーは実践的意識であること、④イデオロギーは自らの発生根拠を知らないで「自己運動」する意識であること、という4つのモメントを与え、これに生産関係による歴史的形態規定をあたえることで、イデオロギーの概念規定を与えている（上野〔8〕 pp.55-78）。本論文で用いる「イデオロギー」、「実践的イデオロギー」、「実践的意識」、「実践的行動規範」といった用語は、上野のイデオロギー論を前提にしている。

治化した」人々には、階級的イデオロギーや科学的イデオロギーなど特定のイデオロギーの形態をとった認識や行動規範が浸透する余地が少ないと考えているからである。これが、ハーバーマスがフランクフルト学派としての共通性をもっている、第一の理由である。

### 3) イデオロギー的社会関係の無矛盾的理解

第二は、彼がイデオロギー的社会関係の矛盾性を示せないという共通性である。

そもそも、社会関係にかかわる実践的意識は社会関係の物象化という過程で成立する。それは、目の前にある社会関係の肯定的側面を反映して、否定的側面を排除する行動規範を生み出す。しかし、このような現状順応的な行動規範は常に現実の階級関係に曝されている。

P. レーナード Piter Lenard は、フロイトや G. H. ミード Gerge H. Mead の社会心理学的見解について述べ、これらの見解が、個人のレベルの消極的抵抗、あるいは生物的、無意識的なものにすぎず、意識をもつ個人の意図のはいり込む余地を制限しており、それゆえ、「支配的な社会関係における意識的な抵抗は、自己のあい異なる側面の葛藤を反映した逸脱という個人的行為をとおしてしか可能でないようにみえる。また、社会秩序全体が基本的に一体的なもの、一元的なものとして認識されているので、支配的な意味や象徴の圧力や影響にたいしてもほとんど抵抗し得ないものとなっている」と批判している（レーナード〔28〕 p. 96）。レーナードによれば、諸個人が獲得する象徴化され内面化されるイデオロギーには、「絶えざる階級闘争の布置関係が反映」しており、したがって、人々は自らのおかれた階級・性・民族にふさわしい役割を、言語を媒介として学習する。象徴の作用は、支配的社会関係を肯定するとともに、「支配的な象徴や定義は、階級的、性的、民族的闘争の水準を精確に反映」するものである（レーナード〔28〕 p.97）。それゆえ、労働者に内面化されるイデオロギーについては、「われわれの唯物論的アプローチは、意識は物質的存在と弁証法的な関係にあるがゆえに、自己概念を含む意識の変革は、個人を構成する社会的諸関係の相対の変化の結果として生じる」ものであるとして、そもそも「社会関係には矛盾がはらまれているがゆえに、個人と社会秩序のあいだには完全な一致はありえない」（レー

ナード〔28〕 p.236）から，もともと矛盾しているイデオロギーが内在化しているのだということをいう（レーナード〔28〕 p.97; p.145）。

レーナードが示した以上の論点に，私も基本的に同意するのであるが，ただし，この見解だけでは不十分であると考え。第一に，支配的イデオロギーがまさしく支配的＝主流であるその理由が不十分であると考え。そもそも現実のイデオロギー関係は，能動の実体としての経済関係がそれ自体の中にもっている相互前提的側面と相互対立的側面を反映する。一定の社会関係が成立しているとき，経済的諸関係においても相互前提的側面が全面にあらわれ，対立的側面は背景に顔をかくす。これは社会の向自有的側面として当然の姿である。このような関係を補強するのが支配的イデオロギーであり，この支配的イデオロギーは能動の実体としての経済関係に究極的には規定されて展開している。これはレーナードと同じことを言ったわけであるが，それに加えて，支配的イデオロギーは，このように現実の経済関係における相互前提的側面を反映するものであるから，特定の条件の下では受容者にとっても実践的にその合理性が示されるということを明らかにすることが大切である。支配的イデオロギーが支配的なのは，支配者による強制関係を背景としつつも，実践的行動規範としての「合理的」側面による実践的な「利益」の裏付けを媒介としたイデオロギーの再生産構造が存在し，そのイデオロギーを能動的に自己意識とする心的構造が存在しているからである。それゆえ実践的イデオロギーは全くの虚偽意識ではなく，現実（の利害関係）を反映した実践的意識形態であり，しかし同時に，現実の諸関係の一側面だけを反映した「不明瞭な」意識形態なのであることが示されるのである。

第二に，さらにそのようなメカニズムのなかで支配的イデオロギーを受容しているにもかかわらず，労働者の，あるいは人間としての利害にたった社会変革のイデオロギーを労働者が我がものとするという理由が不十分にしか述べられていない点が問題である。すなわち，仮に，階級関係を反映するイデオロギー的構造があるということを指摘するだけでは，労働者が労働者階級的利害を反映したイデオロギーを支配的イデオロギーと同程度に等しく受容していることすら言えないのである。ここには労働者の意識を規定するものが，社会と自律的な心的構造



の2側面からなり、労働者の意識自体に能動性があることを理解することが必要である。

労働者が持たざるをえない現代社会における階級的規定性と、人間の存在そのものに対応しているがゆえに心的構造に反映されやすい自由や平等や博愛といった類的社会関係を反映する意識などは、日常生活から実践的に意識にのぼってくるし、また階級闘争を媒介とした観念材料の提供の中で意識にのぼってくる。支配的イデオロギーを受容することが快をもたらしかぎりそれを受け入れ、他の観念材料を意識から排除しようとする心の動きとともに、自らの客観的立場を反映して日常的に降りかかっている不利益をとらえ返すことで、既存の支配的イデオロギーを批判し、環境を変え自己を防衛しようとする心の働きは、どちらも人間の意識の能動的側面をあらわしている。そして、支配的イデオロギーと労働者の現状批判的イデオロギーは、労働者の意識の中で葛藤せざるをえないものなのである。

このようにイデオロギーを理解することはある種の実践的イデオロギーだけが社会関係の中で形成され人々にもたらされるのではないことが理解できる。さらに、人間の意識構造を理解すると、特定イデオロギーのみが人間の行動規範を形成するのではないことがわかる。

ところが、フランクフルト学派はイデオロギーの発生過程を認識材料のブルジョア的加工とみるだけで、このようなイデオロギーを導き出した真の発生根拠である階級関係の存在の規定性を否定する。フランクフルト学派は、人間の行動規範が「科学物神」に包摂されてしまう側面をみて、人間が感性的・悟性的な認識を契機として全体性を把握するに至る理性的な認識をおこなう可能性をみずに、人間のもつ非理性的側面、動物的衝動などに反抗の糸口をみいだした。すなわち、植物的な人間こそが彼らの社会モデルを構成している基本的な構成員なのである。それに加えて、彼らの人間の意識構造にたいする理解の乏しさを背景にして、フランクフルト学派は社会的なイデオロギー環境を支配的なイデオロギーが貫徹する無矛盾なものとして描いてしまう。

アドルノにおいては、「科学」による主体の解体状況は、一度完成されると変

革不能の不動の地位につくものとなっている。というのは、アドルノは、現実社会を「科学物神」によって支配され尽くした社会とみるからである。ハーバーマスも、技術至上主義化された社会として、現実社会を無矛盾化してとらえている。したがって、このような実践的イデオロギーを受容している主体は、非真理としての虚偽意識を受け入れる容器として客体であり、それゆえ、諸主体は非科学的イデオロギーと科学あるいは科学的イデオロギーとの葛藤する存在ではなく、非真理・非理性にからめ取られた存在、虚偽意識の従属関数でしかない。実践的イデオロギーは虚構としての側面のみを付与され、自己展開するものにされてしまう。それは、結局、資本主義においては資本・賃労働関係の相互前提的側面が支配的に貫くという当然の姿を模写するにすぎなくなる。

ラディカルにみえる彼らの立場は、この点でまさしく、現状肯定の理論である。現在資本主義の全き否定の論理は、全くの肯定の論理である。

#### ４） ハーバーマスの２つの心

ハーバーマスのいう「介入主義国家」は、国民大衆の社会関係に介入することで、「後期資本主義体制」の安定性を維持し続けるのだろうか。ハーバーマスは、この安定性を覆す可能性の設定を試みる。彼が示す可能性は、業績イデオロギーの不適合化であり、また、社会的補償が増大してもこの体系に統合される利害を持ちえない層の存在によって生ずる「補償計画主義」の動揺を要因とした正統化への動機づけの解体という限界である（ハーバーマス〔21〕 p.98-100）。

この主張が、正統化の体系に包摂されない層の存在（例えば、学生）を指摘するだけなら、アドルノとまったく同じく社会にたいする「非同一性」をもつ主体を求めるにすぎず、この点で非合理主義は不可避である。しかし、ハーバーマスはこのような指摘とともに、同時に「高度資本主義の生み出す社会的富の量と、この富をつくりだす技術的組織的条件を考えてみると、地位の指定を、主体に納得させるためだけのものにせよ、個人の業績の評価の機構とむすびつけるのはますますむずかしくなろう」と述べている（ハーバーマス〔21〕 p.100）。この主張は、社会構成体における能動の実体である経済的諸関係の変容に受動の実体であるイデオロギー的社会関係が規定されて変容させられ、現実とイデオロギーとの

間の矛盾が不可避免的に発生せざるをえなくなるという唯物史観の立場を肯定しているように見える。そう理解すると、ハーバーマスの見解はフランクフルト学派にとっては画期的な意義をもつ。なぜなら、虚偽意識の受動的実体の自立性・能動性のみが強調されることで、虚偽意識の体制の無矛盾性をフランクフルト学派は示してきたからである。

しかし、ハーバーマス自身は、能動的実体による受動的実体の規定、生産関係の変化に伴う既存イデオロギーの動揺という事態を容認していると考えてはいないようである。ハーバーマスは、現状からの大衆の解放の手段として「コミュニケーション」の回復を唱える。その主張の前提に横たわっているのは、階級性の否定（あるいは経済的階級としての規定性の否定）や、「非同一」的主体が解放主体であるというアドルノ流の図式であり、あるいは、解放主体の実在性も不確かとなる理論構造を背景として、「公開討論」を通じて「批判的理論」の信奉者間のコミュニケーションによって理性の回復をはかろうとするヴィジョンを描くなどの、主観主義への回帰である。

ハーバーマスの心は2つに分裂しているように見える。第一は、コミュニケーションを媒介手段として、失われた「同一性＝理性」を自己反省することを通じて、現実世界を変革しようとする主観主義の心である。第一の心は、現実の社会関係を与件として反映するがゆえに、現実肯定的側面をもつ実践的イデオロギーが自己展開したものとして、目の前の現実のイデオロギー状況が無矛盾なものとしてとらえる主観的立場に通じる。

第二の心は、イデオロギーの実体的規定をつうじて科学的認識に至ろうとする不明瞭であるが萌芽的な合理的精神である。ハーバーマスの第二の心としての合理的主張は、これまで私に対置してきた、心的構造の理解を基礎におくイデオロギー認識につながる可能性を持つものである。しかし、ハーバーマスの前には硬直的な「正統派マルクス主義」の図式的反映論あるいは感傷主義的な疎外論といった批判すべき理論状況があるためかもしれぬが、彼はフランクフルト学派の先輩達の理論的立場にたえず心を奪われている。

以上みてきたような理論的状況は、社会学の洗礼を受けるドイツ社会学者、

とくにフランクフルト学派労働問題研究者集団に重大な影響を与えざるをえない。アドルノからハーバーマスへの旋回，そしてハーバーマスの2つの心がこの集団にどのような影響を与えてきたのかを以下で検討することにした。

（以下続く）

## 文 献 注

- 1) Adorno, Th. W. *Negativ Dialektik*, Frankfurt am Main, 1966. (Th. W. Adorno, *Gesammelte Schriften*, Bd. 6. 1973.)
- 2) Bergmann, Joachim, Shigeyoshi Tokunaga (eds.)  
*Economic and Social Aspects of Industrial Relations*,  
Frankfurt am Main; New York, 1987.
- 3) Tokunaga, Shigeyoshi, Joachim Bergmann (eds.)  
*Industrial Relations in Tradition*, Tokyo, 1984.
- 4) 朝日吉太郎 「ドイツ労資関係とデュアルシステム（2）」（『大阪市大論集』第67号），1992年7月。
- 5) アドルノ 「序章」（アドルノ／ポパー他『社会科学の論理—ドイツ社会学における実存主義論争』城塚登，浜井修訳，河出書房新社），1979年。
- 6) アドルノ 「社会学と経験的研究」（アドルノ／ポパー他『社会科学の論理—ドイツ社会学における実存主義論争』），1979年。
- 7) 上野俊樹 『経済学とイデオロギー』有斐閣，1982年。
- 8) 上野 『アルチュセールとプーランツァス』新日本出版社，1991年。
- 9) 尾関周二 『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』大月書店，1989年。
- 10) カイザー，H.-R. 『フランクフルト学派の国家と社会』芦田亘，井上純一

訳, 昭和堂, 1984年。

- 11) 鈴木茂 『偶然と必然—弁証法とはなにか』 有斐閣, 1982年。
- 12) 鈴木 「現代における理性と経験」(鈴木茂ほか編『知識とは何か』 青木書店), 1984年。
- 13) 戸木田嘉久 『現代資本主義と労働者階級』 岩波書店, 1982年。
- 14) 徳永重良 「国家独占資本主義下の労働問題の研究方法」(社会政策学会年報第20集『労働問題研究の方法』 御茶の水書房), 1976年。
- 15) 徳永 「ドイツにおける労資関係」(戸塚秀夫・徳永重良編『現代労働問題』 有斐閣大学叢書), 1977年。
- 16) 徳永 「西ドイツ工場レベルの労使関係—鉄工業の事例を中心に—」(隅谷三喜男編『労使関係の国際比較』 東京大学出版会), 1978年。
- 17) 徳永 「西ドイツ労資関係の展望と研究動向—1つの覚え書き—」(研究年報『経済学』156号), 1985年2月。
- 18) 野村正實 「新フランクフルト学派の労使関係研究—第1回日本=西ドイツ労使関係国際比較シンポジウムの報告—」(『経済評論』), 1983年2月。
- 19) ハーバーマス, J. 『<イデオロギー>としての科学と技術』 長谷川宏訳, 紀ノ國屋書店, 1984年。
- 20) ハーバーマス 『公共性の構造転換』 細谷貞雄訳, 未来社, 1973年。
- 21) ハーバーマス 『認識と関心』 奥山次良, 八木橋貢, 渡辺祐邦訳, 未来社, 1981年。
- 22) ハーバーマス 『コミュニケーション的行為の理論(下)』 丸山高司, 丸山徳次, 厚東洋輔, 森田数実, 馬場孚瑳江, 脇圭平訳, 未来社, 1987年。
- 23) 速水治郎 『フランクフルト学派の理論』 世界書院ぷろばあ叢書, 1986年。

- 24) ヘーゲル, G.W.F. 『大論理学（中巻）』（『ヘーゲル全集 7』武市健人訳，改訂版，岩波書店），1966年。
- 25) マクレラン, D. 『After Marx』重田晃一，松岡保，若森章高，小池渺訳，新評論，1985年。
- 26) 三島憲一 「理論と実践の間—フランクフルト学派の逆説的影響」（徳永恂編『フランクフルト学派再考』弘文堂），1989年。
- 27) 見田石介 『ヘーゲル大論理学研究②』ヘーゲル論理学研究会編，大月書店，1980年。
- 28) レーナード, P. 『人格とイデオロギー』茂木俊彦，宗沢忠雄訳，大月書店，1988年。
- 29) ロールモザー, G. 『批判的理論の貧困』城塚登，竹村喜一郎訳，理想社，1983年。

\* Habermass 日本語読みについてはハーバマスやハバーマス，ハーバーマスなど出版物によって異なっているが本論文ではハーバーマスに統一しておいた。